

山に親しみ山に想う (13)

— 濟州島の寄生火山 (6) —

<文・写真> =岡本=

6. オルムと墓

オルム探訪で墓に出くわさずに山頂に至ることはほぼできない程、濟州島内には墓が多く、墓はオルムと切り離せない因縁のある存在である。

韓国では、近年火葬、納骨の普及が図られているが、長く続いてきた土葬の風習は根強く残っている。特に、濟州島では土葬の風が強く、島のいたるところに土饅頭型の墓がある。土葬の場合、埋葬地が吉相であれば、「孝を尽くすことになり、子孫が代々栄える」との観念から、土饅頭の墓は吉相の地「明堂」に集まることになる。明堂に位置したオルムは、格好の墓域となり、低いオルムでは墓が麓から頂上まで蟻が群がるように密集することになる。かと思うと、樹林帯の奥深いオルムにも格式のある立派な墓が多い。

墓は一人一基の習わしである。一族の墓は明堂を求めて島内のあちこちに散在することになる。祖先崇拜の念の篤い島民は、墓の手入れに精を出す。お盆の前には、ポルチヨ(伐草)といって、一族総出で各所の墓を訪れて草を刈るなどの手入れをする。墓の多いオルムでは、ポルチヨの人びとが墓へ往来する人跡路が必ず出来ている。ポルチヨ作業の休憩中の人びとに会うと、必ず濁酒やコーヒーを飲んでいけと勧められ、時々ご相伴に預かったりもした。オルム探訪では、このオルムには墓がありそうだと思うと、先ず麓でポルチヨの人びとが踏んだ人跡路がないかと探し、人跡路があれば、当然これもご相伴に預かる。ポルチヨに最近では変化が起こっている。

濟州島を離れて本土に移住する人が増えたが、そんな人びとにとって故郷の島に戻ってポルチヨをすることが面倒な状況になってきている。そのため、ポルチヨを代行業者に頼むことが増えてきているという。また、島内に散在する墓を移葬し、一族の墓を一ヶ所に集めた墓苑を作る傾向が出てきている。移葬のために掘り返した墓穴が不思議なことに埋め戻されていないのに気付いたのだが、何故なのかについて現地の人に尋ねる機会を残念ながら失した。



深入りし過ぎかもしれないが、更に説明を加えたい。墓は直径2~3mで高さ1m以下の土饅頭型、周りは四角形の石垣で囲まれている。囲いの中には墓碑銘の他に、格式のある墓では童子石と文人石という石像が立っている。文人石は官服を着ており、多分被葬者の生前の姿なのかも知れない。童子石は、被葬者の靈魂を慰め来世に案内する導師であると言われている。童子石は美術的にも意義があり、鑑賞にも耐えるものである。童男と童女の二体があって、高さ40cm~90cm、2.5

等身から4等身で顔が大きく愛くるしい。

墓碑銘では被葬者の生前の履歴がうかがえて興味深い。「戸曹参議姜…之墓」「貞夫人梁氏之墓」「学生…」「訓長…」等と刻まれている。戸曹参議は李氏朝鮮時代の正三品堂上の爵号、貞夫人は正従二品の文武官の妻の爵号、学生は無官職の一般人への尊称、訓長は寺子屋先生クラスの人への尊称である。この他にも、儒林、処人、恭人、訓練院判官等色々な尊称が冠されている。正二品、三品の高官が济州島で多く没しているのは、李氏朝鮮約500年間に200名以上の高級官僚が都の京城(ソウル)より流配され、戻されることなく客死したからだろう。



標高120m程のオルムを訪れた際のメモに、「頂上といっても平坦なミカン畑の中である。畑の中に墓が二基ある。墓碑銘は風化して読み難いが、「朝鮮国訓練院判官李允之墓」と辛うじて判読できる。文人石も目鼻が風化し、白い苔に覆われている。長い時間の流れに魅せられて立ちすくむ。」と記している。島流しされ、許されることなく没した人の無念が漂う墓であった。

麓と広い火口内に50~60基の墓が圧巻のモザイクのように密集しているオルム、そこに草を食む牛や馬がゆったりとうごめいている、そんな風景を隣のオルムの頂より眺めながら、時間の感覚もなく座り込んでいたこともあった。

(つづく)